

第9回「日本語大賞」

テーマ「ちょっと気になる日本語」

一般の部 優秀賞 受賞作品

「だっちゃ！」

熊本県
感王寺 美智子

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

「だっっちゃ！」

感王寺 美智子

四年半、気仙沼の仮設住宅で、暮らしていた。集会所には、日本各地、海外からも、沢山のボランティアさんが、いらしてくれ、笑い声と様々なことばが、飛び交っていた。

「へえ、そーなんだあ」

「リンユー！ そーなんだ、じゃねえ、そうなの、で、す、か、だっっちゃ」

「あー、ごめんなさい、そうなの、で、す、か、だっっちゃ！」

「だっっちゃは、いらねえ！」

リンユーと、おばあちゃんのやり取りに、いつも、みんなが、笑う。

留学生ボランティアの皆さんが、定期的に、集会所で、カフェを開いてくれた。そのメンバーである、中国人のリンユーは、日本語が、かなり達者だ。今時の日本の若者が、お喋りしているのと変わらない。しかし、敬語が、解らない。日本語を、大好きなアニメで、覚えたからである。

この仮設住宅の長老である、おばあちゃんが、リンユーの敬語の先生なのだ。

おばあちゃんは、リンユーが、ここへ来るまでは、仮設住宅の部屋に引きこもりがちだった。集会所にも、あまり顔を出すことは、なかったのだ。

「私が、呼んでくるよ」

リンユーは、来た最初の日、おばあちゃんの部屋の前に行って、窓の下から、声をかけた。

「おばあちゃん、お茶っこだよ」

案の定、返事はない。

「すっごく、おいしー、ケーキ、食べるでしょ？ ねえ、一緒に、食べようよ！」
すると、窓が、ガラツと開いた。

「食べようよ、とは、なんだべ?! この、わらすが！ 年上には、食べますか？ だっっちゃ！」

リンユーは、ポカンと口を開けて、窓の下で固まった。おばあちゃんの甲高い怒鳴り声が、怖かったのだろう、と思い、私は、おばあちゃんに、頭を下げ、リンユーの手を引っ張って、退散しようとした。

しかし、リンユーは、動かない。目を丸くして、おばあちゃんを見つめている。

「ラムちゃん……」

小さな声で、呟いたと思ったら、いきなり、興奮しはじめた。

「ラムちゃん、ラムちゃんだっっちゃ！」

リンユーは、日本のアニメ『うる星やつら』の大ファンだったのだ。「だっっちゃ」は、主人公ラムちゃんの、ログセだ。それを、まさか、この東北で、しかも、お年寄りのおばあちゃんの口から、聞くとは、思ってもみなかったのだろう。

「ラムちゃん？ なんだっっちゃ？」

この日から、おばあちゃんは、意味もわからぬままラムちゃん”と、呼ばれるようになった。そして、毎回、部屋に呼びに来る、リンユーのおかげで集会所にも、顔を出すようになった。

「ふたりは、次第に、国境を越えた、おばあちゃんと孫娘のようになっていった。

リンユーが、敬語を忘れると、ラムおばあちゃんは「ほら、忘れてっぺ」と、自分のほつぺたを、手のひらで、ポンポンと叩く。

「丁寧なことはな、礼儀だけじゃねえ、ことばのおす（し）ろいになるっちゃ。ほら、ち（き）れいなことばさ使うオナゴは、なんだか、美人さんに見えるっぺ」

リンユーは、敬語を少しずつ、覚えていった。そして、気仙沼弁も一緒に……。

「いくら、敬語さ覚えて、おしろい塗っても、おばあちゃんのナマリさ、うつつたら、台無しだべなあ」

と、みんなが、からかった。

そんな楽しい時が過ぎるのは早く、やがて、リンユーが、帰る日が来た。三月だというのに、冷たい雪が、降っていた。

「ラムおばあちゃん、長い間、お世話になりました」

リンユーは、深々と頭を下げた。

「なぐにを、なにを。それは、嫁き行くとき（き）、言うことばだっちゃ。まだまだ、日本語、ダメだな」

おばあちゃんは、潤んだ目を、ごまかすように、言った。リンユーは、何か言おうとしたが、もう、ことばにならなかった。

「……だっちゃ」

「うん、うん、だっちゃ」

おばあちゃんは、頷きながら、自分の古びた手袋を外して、冷え切った、リンユーの手にはめた。まるで、ことばにならない思いを、手から手へ、繋ぐように。ふたりの温かい息が、混じり合って、降り落ちる雪を溶かすようだった。

それから、三か月が過ぎた頃、リンユーから、一枚の絵はがきが届いた。半袖のシャツだというのに、あの日の、おばあちゃんの手袋をしている。

——今、日本の敬語が学べるアニメを作ろうと、がんばっています。だっちゃ！——
——いいいな字だった。

すべての日本語には、温かなふるさとが、ある。繋げていきたい、ふるさとが呼吸をしている。だから、日本語は、美しい、
だっちゃ！